

# まかべの民話

真壁のまちに伝わる民話をご紹介します。(民話の番号は表面の地図に表示してあります)

(民話典:「まかべの民話」 枝 久夫 著)

## ① 上の鶴屋、下の鶴屋

下宿の中央の十字路に、各地への里程が定められていたという『真壁町道路元標』が置かれています。この角に明治・大正・昭和の初めにかけて鶴屋呉服店(潮屋家)と言われ、田舎の三越とも呼ばれていたという豪壮な構えのタバコ屋があります。県下でも指折りの大きな呉服屋だったこの店から30mほど南の浦町の愛宕神社隣に、同じ屋号の鶴屋(古橋家)という大きな荒物屋がありました。浦町を通る人は鶴屋のお客だ、と言われるほど繁盛していたといえます。

このことから、町の人は呉服屋を上鶴屋、荒物屋を下鶴屋と呼んでいたといえます。昭和初期の廃業以後も白壁土蔵の店と蔵は、昔の豪商の面影を残しています。

## ② 上宿の薬師様

上宿町民の勞力奉仕によって改築された上宿の薬師様は、約300年前の貞享5年に建てられました。昔、怠け者の男がいて、金色に輝くお堂の中の薬師如来像を見て「これを売ったら大金が手に入るだろう」と、悪心を起し、家に隠しておいたところ、眼がだんだん悪くなり失明寸前までになってしまいました。

男は、薬師様の罰が当たったと思い平謝りして仏像を元の場所に返したところ、眼も元通りによくなり、それから一生懸命に働くまじめな男になったとのことです。

## ③ 真壁に来た吉田松陰

尊王倒幕のリーダー格、吉田松陰が安政の大獄で刑死したのは安政6年10月27日、30歳の時です。嘉永4年22歳の時に全国各地を遍歴しました。『吉田松陰東北旅日記』によると、真壁を通ったことが記されています。

日記には『弁天塚を拝み、浦町・角口・西町・羽羽・亀熊より門井に向かった』とあります。当時の西町は飯塚村といって、真壁の西大通りとして旅人の多い所でした。更に西町長屋門宅で小憩とありますが、これは、長屋門の外観から当時の地主で飯塚村の寄合衆の世話役を務めた細谷家だとされています。

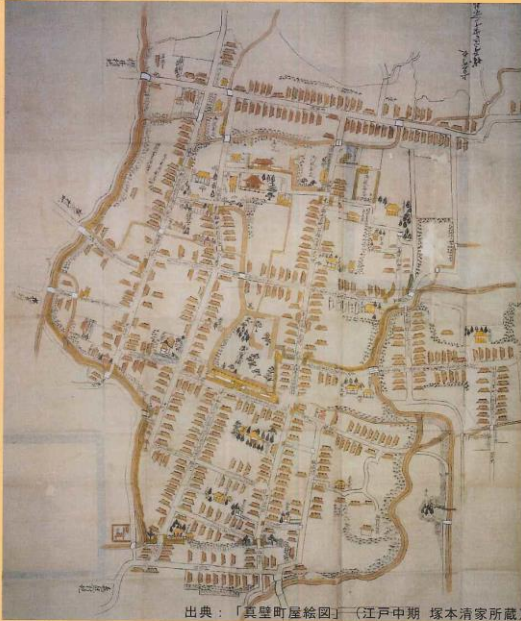
## ④ 真壁の大中・小中

新宿に昔、造り酒屋で庭に推定400年にもなる県天然記念物指定の話もあったという高野槇の大木がある中村家があります。その東50mの所に土蔵造りの店舗を構えていた中村家本宅には、加波山事件で志士に金を貸した有名な話があります。

明治17年9月23日、町屋分署(現桜川警察署)を襲撃した16名の志士は、帰途、新宿・中村家に押し入り軍資金の調達を頼みました。豪胆な中村家の主人はボンと20円(現25万円)という大金を差し出し、度肝を抜かれた志士は「政府転覆成功の暁はお返しする」と借用証文を置いていきました。

しかし、翌日警官隊との戦に破れ全員捕縛され処刑されてしまいました。無期刑になった志士の1人が出所後謝罪と返金に中村家を訪れましたが、志士の慰霊に遣うようにと受け取らなかったといえます。

志士を陰ながら助けた真壁商人の心意気、江戸時代より明治にかけて豪商だった両家を世人は、真壁の大中・小中と呼んでいたといえます。



出典:「真壁町屋絵図」(江戸中期 塚本清家所蔵)

## ⑤ 不動尊と怨みの松

お詣りするとイボが取れるといわれる「イボ取り不動」の前に、斉藤伝鬼坊の碑という小さな石碑があります。伝鬼坊は新治村(現筑西市)井出の出身で、天流という一派をみだした武者であり、真壁17代城主・久幹の家臣・桜井大隅守と不動前であつた合戦をすることになっていました。

しかし、卑怯な久幹の家臣に矢を射かけられ38歳で怨みをのんで殺されてしまいました。その際に、こたてにとつた松が伝鬼坊怨みの松と言いつた松が伝鬼坊が亡くなったから毎年疫病が流行したため、村人は伝鬼坊のたたりと恐れ、『判官の杜』を建てました。

その後、昭和32年に供養のために建てられたのがこの斉藤伝鬼坊の碑です。

## ⑨ 任蔵と時の鐘

古城の常永寺には、上宿が生んだ勤王の志士・桜任蔵の墓があります。任蔵は人情に厚く、安政の大地震の時は蔵書を買った十数両と水戸の殿様より贈られた米百俵および金子を全部罹災者に分け与えました。

また、あんまさんが寒い夜に単衣1枚で流して歩く姿を見て自分の綿入れ半てんを着せてやったという逸話もあります。陰の活動家でしたが、昭和10年3月に有志により墓碑が建立されました。

この墓の傍には、昭和31年に鑄造された鐘があります。太平洋戦争に供出した旧鐘は270年前の正徳4年に浅野家臣大石十兵衛忠良・大石作内発起人により寄進されたもので、その当時は『時の鐘』として朝6時から夜10時まで1時間毎に町の人に時を知らせました。その音色は、遠く下館在まで聞こえたと言われています。

## ⑥ 義経の借用証文

古城の真徳寺には、義経の借用証文が寺宝として残っています。その借用証文は縦37cm、横幅45cmの和紙に重臣亀井六郎重清の名で「食糧難渋に付、粟7斗借用す 文治4年子3月8日」と記されています。

度重なる火災で記録がないため、この証文がこの寺にある理由も義経が立ち寄ったことも不明ですが、源義経が兄頼朝の怒りに触れ、奥州平泉の藤原氏を頼って落ち延びる際、京都から平泉へ向かう途中にここ真壁を通ったと伝えられています。

この1年後に義経は妻子もろともわずかに31歳で悲惨な死を遂げました。

## ⑦ 大林院と犬供養

日光連山に雪が見えるころになると、日光おろしと筑波おろしが1日中街の中を吹き荒れ、昭和初期の真壁は実に寒かったそうです。その中を住職が衣を身につけ「南無妙法蓮華経～」と唱えながら街を通り、人々は門口で手を合わせました。

旧10月12日の夜は、お祖師様のお会式で、戦前までは古城の大林院の境内には、露天商も出て参詣人で賑わっていたようです。

古城に昔から伝わる風習で、犬はお産が軽いのでそれにあやかるように主婦10余名が犬供養講をつくり、正月の最初の戌の日に供養して会食を楽しみます。主婦にとっては楽しい1日となるようです。

## ⑧ 筑波鉄道開通秘話

筑波鉄道が開通したのは大正7年9月ですが、その時沿線各地でいろいろな騒ぎがあったようです。真壁町でも駅をどこにするかが問題になり、最初の計画では、伊佐々から北へまっすぐに今の真壁高校の西辺りになるとのことでしたが、住民から様々な反対があり、やむなく桃山の踏切から東へ大きく迂回して町の東端、人家のない古城になりました。

このころの汽車は、小さい客車を引っぱってゴットンゴットンと走るのでマッチ箱汽車と呼ばれ、真壁の人たちに親しまれていました。